様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：６２６０８
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０７４０７

研究課題名（和文）戦後のソ連における日本人捕虜1945年～1956年

研究課題名（英文）Japanese POW in the USSR after WWII 1945-1956.

研究代表者
小林　昭菜（Kobayashi, Akina）

国文学研究資料館・研究部・特定研究員

研究者番号：２０７８４１６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、従来の先行研究を見直し、「シベリア抑留」を冷戦期のパワーオブポリティクスの側面から考察することを最終目標としたものであった。研究実施時に重要視したのは、海外での一次史料の収集と史料の読解及び分析。ロシアでの史料調査は、公文書館の様々な事情により調査に限界があったものの、研究成果の一部は、国内外の研究会や学会で発表しただけでなく、単著の刊行も行った。ソ連における外国人捕虜問題の国際会議を企画し、学際的な国際交流を図ったことも成果の一つ（2017年2月、法政大学）。会議の反響は高く、学者間だけでなく、ジャーナリストや一般参加者に対しても抑留史の社会的認知度の向上に貢献できたと言える。

研究成果の概要（英文）：This project aimed at reexamining the historiographies of Japanese POWs in USSR after the World War II and considering this history from the aspect of the Power of Politics during the Cold War. Collecting and analysing the archives which are related to this history was one of the main purpose of this study. Fortunately,my first book about the Japanese POWs (Shiberiayokuryu Beisokankei no Nakadeno Henyou.Iwanamishoten) was published on March in 2018 and this work disclosed that the history of Japanese POWs is related to the Cold War. Some of the fruits of this study were read on academic conferences in Japan, USA, Russia, Mongolia. The international conference about the foreign POWs in USSR itself was organized by author and it contributed to the academic exchanges between Japan and Russia and gave the fruits back to the society of the family of the deceased or persons concerned.

研究分野：日ソ関係史

キーワード：日ソ関係　冷戦史

１．研究開始当初の背景

本研究は、戦後日ソ（ロ）間に残された未解決課題である、「シベリア抑留」の全体像の構築と、この日本人捕虜抑留の歴史を当該時期の国際関係と照らし合わせて検証することを目標に開始した。第二次世界大戦に関する学術的歴史学的な研究は、国内に数多く存在し、日本社会や日本の高等教育へ貢献、還元され、重要な役割を担ってきていたが、この戦争の延長線上にあるソ連軍に捕捉された日本人捕虜の歴史（いわゆる「シベリア抑留」）は、2000 冊以上あると言われている抑留回想記の数に比して、学術的研究やその成果を著した文献が圧倒的に不足しており、日本の研究史はいまだ抑留回想記に依拠したものとなっている。

このように本研究は戦後の日ソ関係史の「残滓」であり、また北方領土問題とも並ぶ日ロ間の重要なテーマであることから、研究成果は両国の関係発展に寄与するものとなるだけでなく、国内のロシア史研究、冷戦史研究、国際政治研究へ成果を還元すること、また外国語での研究発表、海外の研究者とのコミュニティー形成の積極的な実施も、開始当初から計画に入れていた。

研究それ自体の背景としては、ロシア側が日本よりも相当程度実証研究の蓄積があることを指摘しておかねばならない。ソ連崩壊から 25 年の間に、シベリア、極東の研究者（ボンダレンコ、クズネツォフ）は、公開されたアーカイブスを用いて地方ごとの抑留実態を断片的に検証してきた。さらに、モスクワの研究者（カタソノワ、キリチェンコ）はソ連中央政府のアーカイブスからソ連政府の捕虜政策や対日、対米外交を考察してきた。

他方日本の研究者は、抑留回想記に依拠した研究が主流で、上記ロシア側の研究と抑留回想記及び生存者の証言とを比較する作業、研究者自身がロシアのアーカイブスで調査し検証することまでは行ってこなかった。それでも 2000 年代に入り、日本のジャーナリストや民間の研究者、一部の日本の学者が「シベリア抑留」を検証してきてはいるが、引用史料は回想記や先行研究、史料集を元としており、一次史料を丹念に精査した十分な研究とは言い難いものであった。

さらに言えば、「シベリア抑留」研究の最も基本的な疑問である抑留発生の原因、捕虜総数、死亡者総数が不明であることだけでなく、ソ連政府の捕虜政策、日本人捕虜の労働の経済効果、収容所生活の実態はまだ未解明な部分が多いのである。既述の通りペレストロイカとソ連邦崩壊の影響でロシアのアーカイブスが公開されたとは言え、日本側の学術研究の蓄積はかなり乏しいものであった。

２．研究の目的

このような背景を踏まえた本研究は、一次史料に基づいた「ソ連における日本人捕虜」研究を試みたものであった。捕虜の所属国であったソ連（ロシア）の史料だけでなく、当時日本を占領していた米国のアーカイブスも併せた読解を基軸に、ソ連政府の外国人捕虜政策と政策決定過程、米国の対ソ戦略を比較分析し、「シベリア抑留」の多面的構造を構築することを目的とした。つまり、国際関係からみた「シベリア抑留」像の構築を目指すために、日・ロ・米の史料を本研究に取り入れることに挑戦した。戦後日本が米占領軍により占領されていたことを振り返れば、抑留研究に米ソ冷戦の視点は必要である。これは、「シベリア抑留」が日ロ間だけの問題ではないことを証明する作業であり、先行研究に新たなアプローチを加えるものである。

実際抑留問題の権威であるロシア科学アカデミー東洋学研究所のエレーナ・カタソノワ歴史学博士は、米ソ冷戦の視点を加え 2000 年初頭に研究書を発表したが、同人の研究はソ連がどのように米国を見ていたのかに焦点が当たっており、米国の対ソ観は検証されていなかった。従って、本研究では米国の視点を加えた抑留史の完成も目指した。

要するに、本研究は抑留回想記等個々人の視点を超えたソ連政府レベル、国際レベルで抑留史を捉え、それを位置づける挑戦的で具体的実証的研究を目指したものであった。

３．研究の方法

本研究は、既述の通りロシア、米国のアーカイブスの分析を屋台骨としたものであり、「シベリア抑留」が、国際関係とどのように絡まり合い、処理され、見過ごされてきたのか、史的史料をもとに解明するものであった。意識的に取り入れたのは、これまでの先行研究に見られたような、抑留の労苦を描写してスターリンやソ連批判で完結させるやり方ではなく、一次史料に基づいてソ連の国内状況、米ソの対応を分析し、且つ抑留体験者の証言を考察して、多面的に日本人捕虜抑留の実態の解明とそれを取り巻く構造を研究し、国際的にこの問題を位置づけるということであった。具体的には、当初以下の通り実施する予定を組んでいた。

●ソ連政府の外国人捕虜政策の分析。

ソ連政府は独ソ戦で捕捉した 250 万人のドイツ人捕虜を連邦内に収容していたことから、既に外国人捕虜用の政策は存在していた。従って、日本人捕虜収容前後の外国人捕虜政策を分析し、ドイツ人捕虜に対する政策と比較、日独の捕虜政策に相違があるのかどうか検証すること。また、米ソ対立の先鋭化に伴いソ連政府が日本人捕虜への政策を転換していく様相がロシアのアーカイブスより見られていることから、ソ連の外国人捕虜政策全体を読み直し、日本人捕虜の位置づけをより明確にしていくこと。さらに、スターリン期とスターリン死後の

捕虜政策の違いも明らかにすること、以上の項目を本研究の基本的目的に入れていた。

●米国の対ソ戦略の考察。
米占領軍は、ソ連から帰還する捕虜を脅威と認識し、米国の占領政策を阻害する危険があると考えていた。米陸軍、米空軍はそれぞれ独立した諜報部隊を編成し、祖国帰還直後から帰還者への尋問調査、捕虜郵便はがきの検閲などを行い、米ソ冷戦により互いの国の正確な情報収集が困難な中で、ソ連経済、政治、軍事情報を収集、また収容所の日本人捕虜の生活状況を分析していた。従って、既述の基本的目的を遂行したのち、これをさらに応用するため、米陸・空軍の帰還者を対象とした調査結果を比較、検証することも目的に入れていた。

●日本側史料との比較
ロシア、米国の史料により明らかとなった事実やデータに、抑留体験者の当該時期の心理状態や証言を追加し、より立体的な「シベリア抑留」像を構築することも、本研究のオリジナリティを出す意味で注視した。また日本政府のアーカイブスも分析し、抑留が日本社会に与えた影響を考察することも念頭に置いていた。

４．研究成果
①現地史料調査について
おおよその目的は達成されたが、現地調査に関しては残念ながら予定通り研究が進行しない部分もあった。ロシアのアーカイブスでの調査は、関連する史料収集に一定程度成功したが、米国でのアーカイブス収集は現地調査が時間的制約で実施できず、代わりに過去に現地調査で収集した史料の再検討を行うに留まったことは悔やまれるところである。
ロシア現地調査では、以下の文書館を利用した。ロシア連邦国立文書館（GARV）、ロシア国立軍事文書館（RGVA）、ロシア国立国防省文書館（TsAMO）、ハバロフスク州文書館（GAKhK）である。この調査で注意した点は、中央政府の史料と地方政府の史料の比較である。例えば、拙書『シベリア抑留　米ソ関係の中での変容』で考察したが、中央政府が指示した指令を、地方政府が遂行できず、多数の日本人捕虜の死亡者を輩出することとなった点を明らかにした。地方政府のキャパシティの限界や、中央政府の無理難題の指示、という矛盾が、ソ連の日本人捕虜収容所で発生していたことを、史料を比較しながら検討した。
また、米国の史料の分析では、ソ連から帰還した日本人捕虜の共産主義化をどの程度脅威と認識していたのか、その脅威のレベルはどの程度であったのかについて、占領軍の史料から分析を行った。これらの疑問点は既に本スタートアップ支援開始前に執筆した博士論文でも考察をしてきた部分であったが、これまでの内容を再検討し、米占領軍の史料を再度丹念に読み解いていった。その結果、地方ごとに共産主義化のレベルに差があったこと、思想教育が強化されていた地方においても、一定程度「反ソ的」心情を持つ日本人捕虜がいたことが明らかとなり、また米占領軍が脅威を抱いていた共産主義化レベルは、「期待値を下回っていた」という結果に言及した。
しかしながら、米・ロ史料を分析する中で史料の全てが開示されていないこと（特にロシア）、そのために「シベリア抑留」の全体像の解明には時間を要することを理解し、2 年間で全容解明には至らなかったために、今後はこの反省点を踏まえ国内外の研究者に協力を依頼しながら、丹念に考察を続けていきたい。

②学会発表について
2 年間のスタートアップ支援の科研のおかげで、現地史料収集とその分析だけでなく、研究の途中経過を米国、ロシア、モンゴルの国際会議にて英語で発表することができ、好評価を受けた。特にシカゴの ASEES 大会での発表はラウンドテーブルでの参加で、質疑応答は興味深い体験であった。戦後のアジア体制、日本の戦後、アジアにおける冷戦に高い関心を持つ研究者が世界から参加しており、拙報告をキーワードに議論が展開されたことに、多くの学術的刺激を受けた。このような実りある出張ができたことは、ひとえに本科研に採用して頂いたおかげであり、世界の研究者との交流を図る貴重な機会となった。
また国内の学会では、日本国際政治学会と軍事史学会にて発表する機会に恵まれ、こちらは日本語であったことから聴衆からは抑留に関するより具体的項目の質問や、本研究の展望的観測についての激励や質問を受け、肯定的印象と反応を得られた。国内、国外での発表経験は、本研究完成後に学会や社会に与える影響力を実感できた貴重なものであった。このように本スタートアップ支援は、若手研究者のモチベーションの維持にも大いに貢献してくれたと言える。

③独自企画について
期間中は挑戦的な研究活動にも着手した。自ら第二次世界大戦と捕虜問題に関する国際会議を提案し、協力をお願いした日本史研究者の加藤聖文先生と共に、国際会議を企画・組織し、ロシアとイギリスから研究者を招聘し研究報告と意見交換を実施した（2017 年 2 月、法政大学）。報告者は、イギリスからシェルゾッド・ムミノフ（イーストアングリア大学講師）、セルゲイ・キム（ロシア史研究所研究員）、ウラジーミル・フセヴォロドフ（ロシア軍事科学アカデミ

ー教授）であり、ムミノフ氏は英語報告、他2名はロシア語報告で行った。小林は企画者としてだけでなく当日の露日通訳としても携わり、ソ連の第二次世界大戦史観とソ連における外国人捕虜問題の研究の重要性を日本の研究者やジャーナリスト、一般の参加者に代弁し説明する役目を担った。企画と司会を行った加藤聖文先生のおかげで、日本史の専門家の先生にもご参加いただき、日本史の視点からの戦後と、イギリス、ロシアの視点からの戦後について活発な議論もなされた。この国際会議の成果は、第51回軍事史学会の年次大会でのパネルディスカッション、軍事史学第53号3巻のソ連における抑留・引揚の特集に寄与することとなった。

④2年間の研究成果の集大成について

また、最後にこれまでの研究の成果と2年間の科研事業の集大成として、拙書『シベリア抑留　米ソ関係の中での変容』岩波書店、2018年3月、を刊行できたことをここに報告する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

ウラジーミル・フセヴォロドフ（小林昭菜訳）「ソ連におけるドイツ人捕虜 一九四一～五八年 ―歴史とその記憶―」　軍事史学第53巻3号2017年、p107－118。

エレーナ・カタソノワ（訳＝小林昭菜）「ハルハ河の軍事捕虜」モンゴルと北東アジア研究 Vol.3、2017年、p47-54。

〔学会発表〕（計　5件）

Nobuo Shimotomai, Akina Kobayashi. "The “Thaw” and reforming attempts in the USSR during the Cold War" "One and a Half Centuries History of Japan and Russia: The Epoch of Great Transformations" Hosei University, Jan 18-19th 2018.

Akina Kobayashi, Victoriia Romanova, Yaroslav Shulatov, David Wolff. “A Path to the Cold War in East Asia” Round table. Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies, 49th annual ASEES convention. Chicago. Nov. 10th 2017.

小林昭菜「「シベリア抑留」の発生―関東軍兵士のソ連移送と配置」日本国際政治学会2017年度研究大会分科会B-1「公文書に基づく日ソ外交」日本外交史Ⅰ2017年10月27日。

小林昭菜「ソ連政府による日本人捕虜への政治教育」第10回ウランバートル国際シンポジウム「ユーラシアにおける日本とモンゴル」、2017年8月26－27日。

小林昭菜「シベリア抑留はロシアでどのように研究されているのか」第51回軍事史学会年次大会パネルディスカッション「復員・引揚・抑留」舞鶴赤れんがパーク、2017年5月27－28日。

〔図書〕（計　3　件）

小林昭菜『シベリア抑留－米ソ関係の中での変容』岩波書店、2018年3月28日。

小林昭菜
「ソ連抑留1年目の日本人捕虜高死亡率の原因とソ連政府の対策」、ボルジギン・フスレ編『日本人のモンゴル抑留とその背景』2017年2月、p147－170。

小林昭菜「米ソ冷戦と抑留問題－ソ連による捕虜の「ソビエト化」と米占領軍の「防衛網」－」、下斗米伸夫編『ロシアの歴史を知るための50章』2016年11月、p190－195。

〔その他〕
ホームページ等
https://researchmap.jp/kobayashiakina/

６．研究組織
(1)研究代表者　小林　昭菜（Kobayashi Akina）
国文学研究資料館・特別研究員
研究者番号：20784169